



2019 (令和元)年11月1日 (金)

# 藤 棚

第374号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

## 異常豪雨との国民の戦いの素晴らしさ

校長 小川義男

異常な雨である。地球の温暖化が進み、海水の温度が高くなっている。発生する水蒸気の量も著しく増え、それが、これまで例を見なかった豪雨の原因になっているらしい。災害の度に伝えられる風速も異常に強い。軽々しく誰をも非難するわけには行かない。

このところ、政治の世界で、言葉尻を捉えるやりとりが活発である。

河野防衛大臣が、「私は昔から雨男と呼ばれてきた」と言えば、野党が「不謹慎だ」と非難する。彼は、救援に当たらねばならぬ自衛隊の責任者としての自覚をユーモラスに述べたのであろうが、政治家には、悲しみの中でもユーモラスなセンスを期待したい。

文科大臣が、「受験生は、身の丈にあったところで頑張る欲しい」と述べたら非難に曝される。

柴山、萩生田と「実力大臣」が続いて私は心強く思っていたのだが、萩生田氏の、この言葉さえ非難されるとすれば、田舎校長の私などは、「いつから政治は言葉尻を捉えることがメインテーマになったのか」と、慨嘆を洩らしたくなる。

東大 早稲田のみが大学ではない。我が狭山ヶ丘も、いわゆる進学校ではあるが、私は常々、「難関だけが大学ではない。それぞれ、『身の丈に合った』ところで全力を尽くせ」と、生徒に語りかけている。「敵を知り己を知らば、百戦危うからず」との諺もある。たじろぐような男ではないが、萩生田氏の文部行政に期待したい。

むしろ野党は「コンクリートより人」とのキャッチフレーズで、八ッ場ダム建設に反対していたことを想起すべきである。私は前上田知事と親しかったが、彼は、野党の出でありながら、一貫して、八ッ場ダム建設の必要性を強調していた。

幸い、八ッ場ダムは完成し、この度の水害に大きな役目を果たした。「八ッ場」は、この先も大きな役割を果たすことであろう。

冒頭に述べるべきであったが、水害で被害者、特に、亡くなった方もおられる事は、痛恨の極みである。砂漠の国に比べ、多雨の日本は恵まれた国ではあるのだが、異常気象は、この先も続くだろうから、国全体としても、生活者個人としても、豪雨、水害、山崩れにはしっかりと対応

しなくてはならない。

被災地を見舞った大規模停電は、文明がいかに脆いものであるかを痛感させた。原発を回って巨額な賄賂に汚れた電力会社もあるようだが、残念な話である。独占企業であるが故のたるみなのであろうが、与野党の論議の中から、電力に競争原理を取り入れる方途を策すべきであろう。日本式建築が、強風に弱いことも痛感させられた。今後は、強風に強い家屋を建設することが求められる。理系或いは、建築分野に進学する諸君に期待したいところである。電柱が風に弱いことにも驚いた。都市部では、地下に巨大な通路を設け、その中に一切のガス、電気等を配置すべきであろう。

水道の断水にも驚かされた。今後は、緊急事態への対策が、生徒諸君の明日に求められるのではないか。

実は私も、水害に遭遇したことがある。27歳の時であった。低地の川の畔の、家賃千円という借家であった。六畳の部屋に、三畳の台所だけという家であった。便所は、家の裏に穴を掘り、厚板二枚を渡しただけという代物。水は30メートルほど離れた所にある湧き水。米は、ここでといた。周りは草原、ここに生えている藨を切り取り、皮も剥かずに身欠きニシンと一緒に煮て食べたが旨かった。

実は、ここに暮らした四ヶ月が、私にとり、生涯で一番幸せな時だったのである。

夢は豪雨によって破られた。バイクで映画を見に行き、帰って来たら、家の周りの低地は、水に囲まれていたのである。僅かに座敷のある北側だけが少し高くなっていたので、窓を開けて入った。どうも玄関の下から激しい水音が聞こえる。掘っ立て小屋だから玄関は土間である。

棒でつつくと玄関の土間は容易く崩れ、下には激流が渦巻いていた。この後、鉄砲水が来る可能性もある。ビニールカップを着たまま、裏窓近くの少し高くなったところに林檎箱を置き、そこに座って、朝まで起きていた。

修羅場経験のない私ではないが、あの時の恐怖は、今も、しっかり記憶している。

低地の向こう側に国道が走り、それに沿って「空知川」が流れていた。全国有数の大河である。この大河と国道の間に堤防が走り、国道を守っていた。

明るくなり、堤防に上って見たが、空知川は、向こうが見えにくいほど、幅広くなっていた。

堤防に上って見たが、大河は満々と水をたたえ、静かに流れているのだが、堤防全体がビビビと静かに振動しているのである。あれが決壊したら、助かる見込みは先ずない。

その堤防決壊に遭遇したのだから、この度の被災者の恐怖は、どれほどのものだったろうかと思う。命がけで救出に当たった自衛隊、警察、消防の皆様に深く深く感謝と敬意の誠を捧げたい。

生徒諸君も、やがて結婚し、家庭を築かれる事と思う。お願いしたい。住居を定めるときには、私のように無謀ではなく、そこに予想される危険を洞察し、どうか安全なところに居を構えて頂きたいのである。

家屋を倒す突風が襲う危険も、これからは予想しなくてはならぬ。日本式家屋は、異常温暖化が予想される未来には、少し弱いかもしれぬ。

国も自治体も、被災者を守るが関東全域を守る力はないかも知れぬ。「自助協力」これは亜細亜大学の校訓だが、明日の日本には、大切なのではないだろうか。